

【第3部】

ホクレア号：マラマ・ホヌア（地球を労わる）

ポリネシア航海協会
カイウラニ・マーフィー
(Ka'iulani Murphy)

現在、ホクレア号は3年間におよぶ世界一周航海中です。26カ国85の港へ寄り、47,000海里を航海した後、2017年6月に故郷ハワイに戻る予定です。この「マラマ・ホヌア世界一周航海」が目指すのは、私たちの地球、そして私たち自身のために、健やかで安全な未来に向かって航海することです。それは希望と平和について語り合い、すべての人々を結び、愛するものを守る“アロハ”の旅でもあります。

私たちが将来どこへ向かおうとしているのかをお話するために、まず、私たちの過去について目を向けなければなりません。ハワイからタヒチへ向かったカヌーによる最後の航海は600年も前のことです。それ以降カヌーによるタヒチへの航海は知られていません。この何世紀もの空白を乗り越え、ホクレア号はハワイで建造されました。今から41年前のことです。そして1976年ホクレア号は、ハワイ人の故郷タヒチを目指す初めての航海に乗り出しました。その時、ホクレア号を先導したのは、サタワル島（ミクロネシア）の伝統航海師ピウス・”マウ“・ピアイルクです。マウは33日の航海を伝統的航海術で乗り切り、タヒチに到達しました。浜では17,000人近くのタヒチ人がホクレア号を歓迎し、クルーを熱烈に迎え入れました。

ホクレア号は、私たちのモオレロ(伝説)に息吹を与え、クプナ（祖先）から受け継がれる伝統、究極的には私たち自身に対する誇りを目覚めさせてくれました。ホクレア号は、自分たちの言葉と文化の再生と再評価の生きたシンボルとなりました。そしてホクレア号は、失われた民族として苦しんでいた私たちが、人としてのアイデンティティを再獲得していくハワイでのより大きなムーブメントにおいて、非常に重要な役割を果たしました。

多くの新しい冒険がそうであるように、ホクレア号のそれも、当初はそう簡単なものではなく、初航海はたくさんの試練を伴うものでした。何千人もの人々が待つタヒチ到達後、マウは二度と戻らない決意のもと、去って行きました。タヒチへの2度目の航海ではホクレア号は転覆し、クルーの一人で名高い海の男でもあったエディ・アイカウが、カヌーと仲間を救おうとして命を落としました。この悲劇の後にリーダーシップが生まれなかったら、ホクレア号が残したものは失敗だけだったでしょう。マイロン・”ピンキー“・トンプソンは、共通の価値観に導かれてこそ実現可能な、明確なビジョンの必要性を強調しました。彼らにはもう一度マウが、タヒチへ航海するためではなく師として、必要だったのです。

それ以後マウの生徒たちは、今日私たちがポリネシアと呼ぶところの島々を発見し定着した勇敢な航海者たちの西から東への移住をたどり、ホクレア号でオセアニア中を航海しました。2007年、ホクレア号と、マウへの贈り物として建造された航海カヌー、アリンガノ・マイス号は、師へ感謝を示すためにサタワル島へ航海しました。また、マウも贈り物をハワイへ捧げました。マウは「ポ」という儀式を執り行い、ハワイ人生徒の中から5人に、伝統航海師という地位ポを授けたのです。ホクレア号の旅はさらに西、沖縄、日本へと続けました。そして、ポになった伝統航海師たちが日本で交わした会話が、この世界一周航海計画につながっていきました。

私たちはハワイに戻り、この32年間の探求で得たことについて深く考えました。そしてそこから、教育の重要性、自分たちの文化とその価値を不朽のものにすること、自然環境の保護、オセアニアの”家族”との関係を育んでいくこと、といったテーマが浮かび上がりました。航海術を学ぶ者として私たちは、自然の中にあるサインを読み、自分たちの道を見つけます。航海カヌーは私たちの島のようなものです。無事に目的地にたどり着くには、カヌーとお互いを大切に気づかしていかなければなりません。私たちはこの航海が多くの人々を勇気づけ、共通の価値観をもつ地球コミュニティとして一つになり、自分たちと次世代のために望むべく未来を思い描き形作っていくことを願っています。